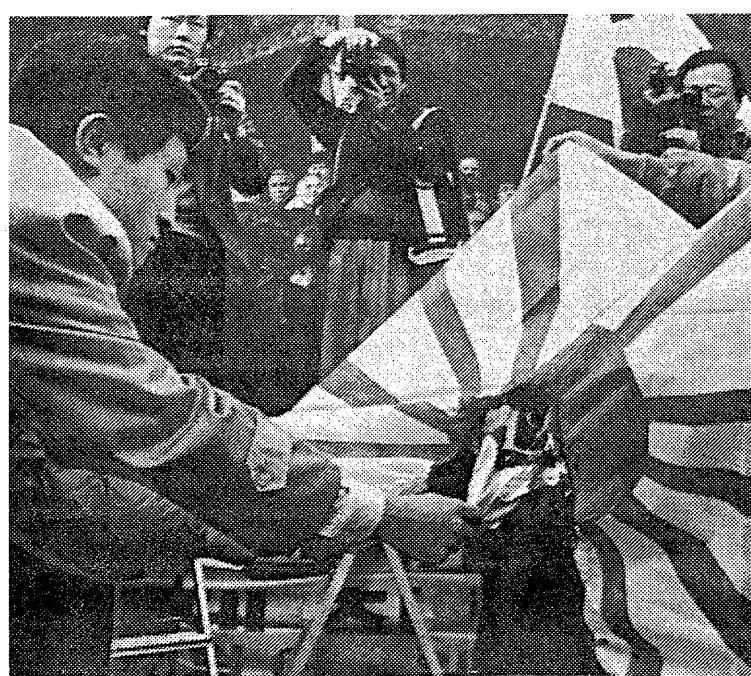


第三回：世界革命を紹介し全世界の帝国主義を打倒せよ！／スター・リーブ主義との国際党派闘争を組織し、世界プロレタリア革命一世界プロレタリア主義を掲げる世界第一政党共産者同盟の最新動向

卷頭 内容	階級的労働運動の根拠地として全労協を建設せよ	1989年 3月1日 第404号 編集発行人 高木一夫 一部 200円		共産主義者同盟（全国委員会） ■ 大阪戦旗社 大阪市北区本庄西2-8-19 明豊ビル401号 大労協内 TEL.(06)371-3706 ○郵便振替 大阪3-63333 高木一夫 ○銀行口座 第一勧銀 515-1058150 高木一夫
	◆フィリピン連帯學習資料⑥ .....P2~4 ◆3・26三里塚闘争に起て .....P6~7 ◆古典學習⑦賃金・価格・利潤 .....P8~9 ◆古典學習⑦賃金・価格・利潤 .....P10			



大喪に抗議し日の丸を燃やす  
集会参加者(2月24日・東京)



姜首相の大喪参列に反対して海軍旗を  
焼く韓国の青年(2月24日・ソウル)

# 「大喪」に内外の怒り

二月二十四日、昭和天皇アキヒトの国葬が「大喪の礼」として行われた。当日、首都は三万二千人の警察権力で戒厳令が敷かれた。政府・ブルジョアジーは当日を休日とし、全人民に服喪を強要。会社、商店は扉を閉ざし、弔旗が立ち並び、正午には全国一斉の默禱が行われた。

「大喪の礼」には新天皇アキヒト、皇族、竹下首相ら行政、立法、司法の長、各界代表のほか、米帝・ブッシュら元首級五十五人をはじめとする百六十三カ国、二十八国際機関の弔問代表・使節ら約九千八百人が参列。自衛隊千六百人がと列、社会党、民社党などほとんどの党首が参列し、天皇の「靈前」にぬかずいた。天皇崇拝の一大国家行事として行われたのである。

一方、全国では東京、大阪など百ヵ所以上で反対集会が行われ、天皇の戦争責任を追求し、天皇制の強化反対を叫んだ。海外では韓国などで竹下首相の侵略戦争否定発言に厳しい批判が浴びせられた。

「大喪の礼」には三つの表情があった。ひとつは国民統合イデオロギーとしての天皇制の強化である。右翼・財界を使つた服喪の強制がその代表であり、政府が政教分離の原則を踏み外してまで「葬場殿の儀」参列にこだわったのも天皇制の政治的宗教的権威を高め上げるためであった。もうひとつが治安彈圧強化である。首都是空前の戒厳体制下に置かれ、封書の開封など天皇の名によって前代未聞の弾圧が行われた。最後が弔問外交とよばれる日本帝国主義の国際的な基軸帝国主義としての登場である。

天皇制攻撃は来秋の大嘗祭、天皇即位式を頂点にさらに強化されるだろう。革命的労働者・学生は職場で街頭で学園で天皇制攻撃の反人民性を暴露しぬけ！共産同盟(全国委)とともに反天皇制闘争のなかからプロレタリア国際主義と結合した労働者人民の一大政治決起をつくりだそう！

## 反天皇闘争の拡大急務 竹下発言は歴史わい曲

日帝・資本・労働貴族一体となり、約一〇年にわたって進められたきた労働戦線の右翼的再編が、いま完了しようとしている。本年一月に総評は解散し、全日本民間労働組合連合会（「連合」）第二次大会後、ただちに官公労を加えた「全日本労働組合総連合会」（略称「連合」）が発足する。これによって「全的統一」は完了する。

次の時代、日本労働運動は「連合」の一元的支配のもとでのたたかいを余儀なくされる。この時代、日本の革命的労働者は長期にわたる持久戦・反撃戦の陣形を日本労働運動のなかに構築し、「連合」の「産業報国会」への転化とたかわねばならない。

長期持久・反撃戦は現在からただちに開始されねばならない。とりわけこの一年においては、「連合」との最後の組織戦として、

「連合」に対して左からの分裂を貫徹し、階級的労働運動の根拠地として、日本労働者階級の反撃の拠点として、「全労協」（全国労働組合連絡協議会）を建設すること、その中軸に現在の中産別を越えた全国的労組連合体を組織するために全力をあげることがきわめて重要となるだろう。同時にわれわれは、「連合」にいかざるえない労働組合・労働者をも含んで、「連合」の産業報国会化に反対し、日帝の侵略反革命戦争出動に対してもたかう労働者の大衆的政治統一戦線を、地域の階級的労組連合を核に組織するために全力をあげねばならない。帝国主義労働運動の逆流に抗するこの二つの戦略的闘争への参加を労働者大衆に大胆に呼びかけ、組織していくことこそが、いま先進的活動家に必要とされている。

八九春闘を階級的労働運動の前進をかけてたたかぬこつ！

## ●八九春闘アピール

# 階級的労働運動の根拠地 として全労協を建設せよ

### 帝国主義の基本政策 支える連合労働運動

方では農産物自由化要求であり、国内農業の切り捨てをねらうブルジョアジーの基本政策にそるものである。同様に彼らの不公正税制是正要求は、ブルジョアジーの消費税導入をあと押しするものであるし、土地改革要求は、いっそう

の土地投機の拡大をブルジョアジーに合理化させるものである。

八九春闘が開始された。「連合」は「春季総合生活改善闘争」と銘打って、昨年に引き続き、「欧米なみ賃金から欧米なみ生活へ」というスローガンを掲げ、八八春闘が「追い風」ならば八九春闘は「（賃上げの）絶好機」であるといふマスコミ論調のなか、7%を中心とした要求を掲げている。同時に「連合」は時短をはじめ、八八春闘と同様の「物価引き下げ、土地改革、不公正税制是正」などの政策制度要求を掲げ、また昨年と同様に日経連から「共闘」を呼びかけられ、これに呼応しようとしている。

「連合」はこの「春季総合改善闘争」のなかで、労働者の生活実感、「日本は、経済大国になつたといわれるが、われわれ労働者の生活は少しもよくなつていい」という自然発生性に立脚し、これを逆手にとって、労働者に対して帝国主義の基本政策に賛同することを要求している。たとえば、彼らの物価引き下げ要求は、一

# 高く掲げた 組織化が要

これには明らかな経済的理由がある。「新イザナギ景気」といわれる現在の日本資本主義の経済好況は、かつての高度経済成長時代と違い、膨大な過剰資本の蓄積のうえに、まず「金あまり現象」から株式投機、土地投機に始まり、さらに「内需拡大」として国家資本の投下を導水路にした建設関連を主軸とする国内投資の拡大があり、それが一巡して国内設備投資にまわるという構造のなかで生まれたものである。しかも過剰資本は海外に投資先を求める、主な生産設

備投資は海外投資によつてなされ、国内での設備投資は非生産部門を軸になさるという構造がある。

こうしたなかで起つた「田高不況」から「田高好況」への転換は、労働者階級の階層分化を急速に進めた。いまや大企業本工労働者を中心とする上層労働者と、中小零細企業の労働者や急速に増大する不安定雇用の労働者が構成する「下層」労働者への分解は、誰の目にも明らかなものになっている。

「年功序列」「終身雇用」の枠から排除された労働者群の膨大な存在がいつそ拡大している。政府は、八八年上半期の雇用調査結果として、有効求人倍率が前期比で一・六倍になり、雇用問題は安定化していると発表した。しかしその中味として、パート雇用の求人倍率が三倍であることに端的に示されているように、製造業も第二次産業も不安定雇用の労働者を増大させていることがわかる。つけ加えれば、これらの動きは次に外国人労働者の合法化・労働市場最底辺への組みこみにいきつくだろう。すでに「不法」労働に従事している在日外国人労働者は數十万人におよんでいる。これらの労働者は日本人労働者のさらに下層の労働者として就業している。放置されるなら日本の「下層」労働者とのあいだで深刻な摩擦を呼び起こしだらう。

労働者階級の分解は、「連合」の「賃上げ闘争」の波及力を消し去つた。大企業本工労働者の賃上げは、労働者総体の賃上げに波及せず、逆に労働者内部の格差の拡大、不安定雇用の労働者層の増大につながっていく。「連合」傘下の上層労働者は帝国主義の超過利潤のおこぼれを保守し、自己の身分を保守するために、企業防衛・労資協調の枠にますます強固にしばりつけられていく。

「連合」は、すでにわれわれがいく度となく暴露しているように、総評労働運動のもつた経済主義という根本的弱点が、帝国主義の危機の時代に帝國主義的経済主義に発展・転化することによって生みだされたものである。「連合」は上層労働者の利益を代表する組織であり、かつての総評のように「日本の労働運動を構造的に代表する」ことはない。また地域における中小労組の運動や大衆的政治闘争など、総評の経験を受けつぐこともない。

われわれ階級的労働運動を建設せんとするものは、中小企業労働者、不安定雇用労働者、「下層」の労働者に依拠し、この層の労働者の利益を代表して「連合」との対抗をなすべきである。総評の遺産たる地域の中労組の争議共闘、日労共闘を継承し、労働運動を構成する地域一般労組を含む地域労組連合を長期持久戦の拠点として建設すべきである。労戦再編の最終局面は、このような地域労組連合の形成と全国的な左派労組結集のための、最

時に議員団を通じた対政府交渉の院外圧力においては、ことどめられるなかで、それは労働者階級の階級形成と無縁なものになつていった。

われわれは、これらの総評の組合主義・経済主義の敗北をしつかりおさえながら、政治闘争の発展をたたかいいとらねばならない。

# 国際主義を 政治闘争の

大のそして最後の好機である。八九春闘のただなかで、このための実際的運動が開始されねばならない。

そしてこの持久戦を敵陣営への反撃戦に広げていくためには、政治闘争が決定的に重視されねばならない。われわれは、総評労働運動の遺産の一つである広く深い大衆的政治決起の伝統を継承することを主張してきた。総評政治闘争の経験は、いまわれわれの手によってこそ発展させられなくてはならない。

総評政治闘争は戦後国民共通原体験たる敗戦体験に直接依拠して組織された。総評の掲げた「反戦平和・民主主義」の要求は、労働者ののみならず、広範な人民の共感を呼び起し、総評政治闘争は国民的運動として高揚した。それは一時代の労働者の自然発生性をよく代表した。

しかし総評政治闘争は、日本資本主義の成長とともに発生し拡大した労働者階級の階層分解に対する対応できず、やがて生命力を失つていった。同様行動に着手し、その他の単産のなかでも分裂の動きを開始している。そのうえ彼らは「階級的ナショナルセンターへの幅広い結集を実現する」ために、社会党左派の労戦統一反対派や新左翼系の労組にも「共闘」「共同」を呼びかけている。しかし、この動きは決して日本の階級的労働運動の未来に展望を与えるものではない。

## ミニ総評を希求する 統一労組懇と協会派



連合派が日本労働運動を制圧しようとしている(写真は87年11月の全民労連結成大会)

また彼らの総評防衛派としての本質は、その理想とする組織形態を中央単産結集型組織に求めているところにもあらわれている。総評と同様の「連合」批判は、結局排外主義に屈伏するのである。

統一労組のこのような「連合」批判からは、せいぜい「戦闘的総評」の再生か、社会党を共産党にとりかえたミニ総評の希求しか生まれない。彼らのもっとも反動的な点は、このような組織を建設することこそが、現在の日本労働者階級の根本的課題であると主張することにある。

また彼らの総評防衛派としての本質は、その理想とする組織形態を中央単産結集型組織に求めているところにもあらわれている。総評と同様の「連合」批判は、結局排外主義に屈伏するのである。

はらまれている。それは自治労の分裂過程での「連合」派の反撃、「党利党略の分裂主義」批判にすきを与え、「連合」派との組織戦での停滞を招くことに結果している。彼らは「連合」が総評主流から登場してきたことの根拠、「連合」の基本的性格、「連合」が依拠する労働者層の実態、総じて「連合」が成立する組織的経済的根拠を労働者の前に明らかにしえず、結局、総評の継承・防衛の決定的限界内に自己を封じ込めてしまっているのである。

統一労組は、その指導党派である日共が日本資本主義を「対米従属」規定し、日本資本主義の帝国主義としての発展を否定するという根本的誤りを、「連合」批判において集中的に表現している。彼らは、総評の戦闘的経済主義が帝国主義的経済主義に転化し、そしてその結果として「連合」が誕生したという本質を見ぬけず、「連合」批判を御用組合批判一般にきりちぢめ、あるいは労働貴族・御用幹部批判にきりちぢめている。「連合」に対するこのような把握からは、統一労組自身が主に依拠する労働者層も総評の主力であった同じ上層労働者層であり、帝国主義の広くばらまかれたおこぼれを保守しようとする「保守意識」が彼らの足元からも再生産されているという認識や、これと対立するだけである。そして民主主義派としての「連合」批判は、結局排外主義に屈伏するのである。

統一労組のこのような「連合」批判からは、せいぜい「戦闘的総評」の再生か、社会党を共産党にとりかえたミニ総評の希求しか生まれない。彼らのもっとも反動的な点は、このような組織を建設することこそが、現在の日本労働者階級の根本的課題であると主張することにある。



総評最後の春闘(総評臨時大会・本年2月)

様の中央単産結集が実態としてむずかしいのにとかかわらず彼らがこれに固執するのは、議会選挙闘争に役立つ組織が形成され維持されつづけること、すなわち集票機構としての単産形態が彼らには必要だからである。この傾向は「全労協」をめざす社会労働者階級としての単産形態のものとして存在している。

労働戦再編の最終局面、われわれは階級的に立つ限りにおいて統一労組を含むあらゆる勢力と共闘するだろう。だがこの過程は、同時に以上のような誤りとたたかい続ける党派闘争を必要としているのである。

同時にわれわれは、「連合」支配のいったんの確立が決定的になるという情勢のもとで、長期にわたる反撃戦を組織していくために、国際主義にしっかりと立脚した政治闘争の組織化が根本的課題になっていることを強く訴えたい。

「連合」支配下の次の10年においては、日本労働者階級には、日本帝国主義の侵略反革命戦争への具体的乗りだしとたたかい、「連合」の産業報国会への転化とたたかうことが決定的な任務になるであろう。このとき「連合」傘下の労働者をも組織した広範な政治統一戦線が形成されることは決定的に重要な。先進的活動家は現在からただちに、かかる政治闘争の組織化にむけて工作を開始すべきである。「連合」内において「連合」の産業報国会化とともに抵抗力のある部分を見いだし、国際連帯闘争を軸にした政治闘争を重層的につくりだすために戦闘せねばならない。最初の一歩から国際主義で武装した政治闘争を組織することこそ決定的に重要である。

八九春闘におけるわれわれの任務は鮮明である。まずこの一年が労戦再編の最終段階であることから、二つの任務が存在する。



地域を拠点として獲得し全国から反撃を

ればならないし、同時に地域の未組織労働者のための具体行動がなされる必要がある。これらを通じて「連合」に対する長期持久戦の陣形をつくりだすことが必要である。

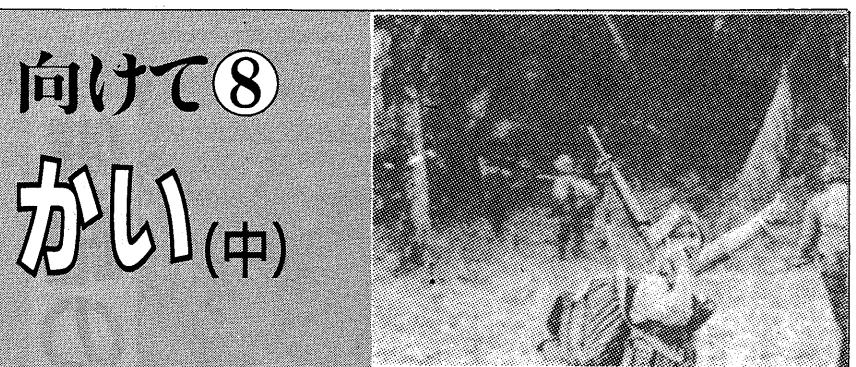
労戦最終段階における二つの任務は、以上の中軸を担い、総評労働運動の根本的総括に立脚して新しい労働運動の構築をめざす、従来の中産別を越えた全国的労組連合体建設にむかうとして、日本労働者階級の反撃拠点として「全労協」を形成していくこと、そして同時にその労働者・労働組合の共通の課題として提起したい。

同時にわれわれは、「連合」支配のいったんの確立が決定的になるという情勢のもとで、長期にわたる反撃戦を組織していくために、国際主義にしっかりと立脚した政治闘争の組織化が根本的課題になっていることを強く訴えたい。

「連合」支配下の次の10年においては、日本労働者階級には、日本帝国主義の侵略反革命戦争への具体的乗りだしとたたかい、「連合」の産業報国会への転化とたたかうことが決定的な任務になるであろう。このとき「連合」傘下の労働者をも組織した広範な政治統一戦線が形成されることは決定的に重要な。先進的活動家は現在からただちに、かかる政治闘争の組織化にむけて工作を開始すべきである。「連合」内において「連合」の産業報国会化とともに抵抗力のある部分を見いだし、国際連帯闘争を軸にした政治闘争を重層的につくりだすために戦闘せねばならない。最初の一歩から国際主義で武装した政治闘争を組織することこそ決定的に重要である。

全國の先進的労働者は、帝国主義労働運動と対決し、階級的労働運動のいっそうの発展のために、八九春闘を階級的に領導せよ！





## 向けて⑧ かい(中)

一九三〇年に結成されたP.K.P.の指導下の一時代は、第二次大戦と日本軍の占領、その後の米軍の再占領という激動の時代でもあった。P.K.P.は、この激動するフィリピン社会を正しく社会主义革命に向かわせた。

一九三〇年に結成されたP.K.P.の指導下の一時代は、第二次大戦と日本軍の占領、その後の米軍の再占領という激動の時代でもあった。P.K.P.は、この激動するフィリピン社会を正しく社会主义革命に向かわせた。

なぜならフィリピン労働者・農民のたたかいは、C.P.P.の指導の下ではじめて、当面するフィリピン革命の単一の路線展望のもとに基礎から組織されはじめたといつて過言でないからである。

C.P.P.の結成以前はどうだったのか?

一九三〇年に結成されたP.K.P.の指導下の一時代は、第二次大戦と日本軍の占領、その後の米軍の再占領という激動の時代でもあった。P.K.P.は、この激動するフィリピン社会を正しく社会主义革命に向かわせた。

なぜならP.K.P.の崩壊とC.P.P.の結成といつ時代にまでさかのぼってみなければならない。

### ● C.P.P.結成以前

フィリピン階級闘争の基本構造を紹介するにあたって、われわれは旧共産党(P.K.P.)の崩壊とC.P.P.の結成といつ時代にまでさかのぼってみなければならない。

Manggagawa ng buong daigdigong pag-kakaisa! Pang-daigdigong pag-kakaisa ng manggagawa Pilipino at Hapon!

いままで、一九三八年の社会党との合同の下にズブズブの議会主義政治へ流れこみ、また戦後の一九五〇年には何の準備ももたないままの武装蜂起を指令して大弾圧をまねぎ、大きく動搖し、混乱しつづけた。

このような党の動搖の下で、フィリピンの被抑圧人民大衆、とりわけもつとも多数を占める農民層は、第二次大戦中彼ら自らが立ち上がり農村を拠点としてたたかった反日闘争の一時期をのぞいては、一度も、意識的に組織されることはなく、反日闘争の遺産さえ食いつぶされる状態であった(P.K.P.指導下の人民解放軍H.B.M.の腐敗など)。

そして農民層・農村のたたかいと、都市労働者・貧民のたたかいが結合されることのないまま、P.K.P.は非合法化され、大衆の革命的組織化とは縁もゆかりもない位置にころげおちていった(一九七四年、P.K.P.指導部はマルコス政権に投降する)。

このようにP.K.P.の指導に批判をもつていた青年・学生党员を中心として、数年にわたる論争と実践の中から一九六八年二月、あらたな共产党(C.P.P.)が結成された。C.P.P.の人々はこれを「共产党の再建」と呼ぶ。

この再建の中核となつたのは、一九六四年に結成された民族主義青年同盟(K.M.)であった。彼らは、社会主義中国と毛沢東思想の影響を色濃く受けながら、おりしも、在比米軍のベトナム派兵、ベトナム参戦国會議のマニラ開催を機に高揚した政治闘争の先頭に立つたかった。このようないたかいをつうじてK.M.は、米国一辺倒であったフィリピン

C.P.P.と、その指導を受けるNPAを核としたたたかいは、一九七〇年代に入つて、反米・反基地・生活苦からの解放を共通項として、全国的に広がつた学生・教職員の大衆運動と結びついていた。

一九七二年に、マルコスがしいた戒厳令の大弾圧の中、多くの学生たちは、N.P.A.に参加すべく農村へ入り、他方、都市ではN.D.F.という非公然統一戦線の形成が始まつていく。

この下で、農村での革命勢力の伸長と平行して、都市の労働者・貧民の組織化が拡大し、一九八〇年五月にはフィリピンのすべての戦闘的な労働組合によつてK.M.U.(五月一日運動)という左派ナショナルセントラルが作られるにいたる。

### ● 農村・山岳地の組織化

これまでわが国で紹介してきたフィリピン階級闘争は、主として都市における労働運動や大衆運動であった。しかし、フィリピン階級闘争の現実を見るならば、農村・山岳地帯におけるたたかいの発展をとらえることは重要である。C.P.P.の指導の下で前進を続けるN.P.A.(新人民軍)の武装闘争と農民の反地主を掲げた革命的大衆運動、そしてこれと結合した各地方における臨時革命政府建設は、今日のフィリピン階級闘争の中心的柱であるといえる。

ここでは、フィリピン社会の基本構造に立脚した農村・山岳地帯の闘争を紹介する。

およそ以上のような流れの中で、おしすすめられていったフィリピン共产党・N.P.A.のたたかいによって、こんにち、フィリピン階級闘争は、

社会に「第一次プロパガンダ運動」とよばれる民族主義的文化運動を組織し、主としてインテリ青年・学生の中に影響力を拡大していった。

他方で、今も彼ら自らが誇りを持

つて語るように「ソシンドダンテの運命的出会い」から始まつたフィリピン共产党の結成は、翌一九六九年三月の新人民軍結成と一体であつた。

旧共产党の下にあつたH.B.M.の員であつたダンテ(いまや伝説的存在であると言われるN.P.A.創設者である)を司令官とし、旧共产党からは武器一つゆずり受けることなくN.P.A.は五〇名で出発した。

（民族民主主義革命と彼らは呼ぶ）

在であると、農村を武装闘争の拠点として組織するたたかいが続いている。

第二に、農村の疲弊にともなつて増大する都市労働者(多くは流動的なサービス業など)・失業者・貧民による労働運動や大衆運動を基礎とし、その中から経済闘争と政治闘争を結合し、政治権力の奪取をめざす政治決起が日々生み出されていることである。

マルコス打倒時に表れた都市の膨大なエネルギーを、地方革命政権の拡大とならぶフィリピン革命勝利のために組織することが必要になつている。

第三に、以上二つの革命の準備戦を一つに結びつけて首尾一貫して領導する党的強化と、この革命への国際連帶戦が、勝利の帰すうを決する段階が始まりつつあることである。C.P.P.はこれを戦略的対峙段階と規定している。

一九七二年に、マルコスがしいた戒厳令の大弾圧の中、多くの学生たちは、N.P.A.に参加すべく農村へ入り、他方、都市ではN.D.F.という非公然統一戦線の形成が始まつていく。

この下で、農村での革命勢力の伸長と平行して、都市の労働者・貧民の組織化が拡大し、一九八〇年五月にはフィリピンのすべての戦闘的な労働組合によつてK.M.U.(五月一日運動)という左派ナショナルセントラルが作られるにいたる。

これまでわが国で紹介してきたフィリピン階級闘争は、主として都市における労働運動や大衆運動であった。しかし、フィリピン階級闘争の現実を見るならば、農村・山岳地帯におけるたたかいの発展をとらえることは重要である。C.P.P.の指導の下で前進を続けるN.P.A.(新人民軍)の武装闘争と農民の反地主を掲げた革命的大衆運動、そしてこれと結合した各地方における臨時革命政府建設は、今日のフィリピン階級闘争の中心的柱であるといえる。

ここでは、フィリピン社会の基本構造に立脚した農村・山岳地帯の闘争を紹介する。

（民族民主主義革命と彼らは呼ぶ）

# フィリピン革命への連帶に 人民の現状とたた

ツクで新人民軍は設立された。N.P.A.は、結成以降めざましい拡大をとげ、一九七六年には、現在のメトロマニラ地区以外の主要な地方にゲリラ軍を建設し、ゲリラ戦線は、二〇〇を数え、現在では、群島全域に広がる結成時の数百倍の勢力へと成長し、ゲリラ地帶を打ち固め「解放区」を拡大して、いる。

人が必ずいる。このような条件を満たしてNPAは、波が押し寄せるように組織を拡大していくのである。この第一段階で、NPAがバリオ内での活動を始めるための最初の宣伝活動と調査が行われる。

農民・農業労働者は、生存すら困難な貧困の中に置かれている。このような貧しさを強制する買弁ブルジョアジー（大地主の過酷な搾取）によって、農民たちが反抗すれば、たちまち國軍やガードマン・反共自警団（ビランテ）によって弾圧され殺されるのである。

NPAはこのような貧農や農業労働者に対する、「敵は大地主」と完全

革命的なゲリラ戦線は、農村地帯のみならず地方都市の多くの県や町を包括している。そしてこのゲリラ戦線の中に、もつともしつかりとしたゲリラ根拠地「見えない解放区」がある。NPAは、少数民族の居住区や農村をたんねんに回り一つひとつ組織していく。これらの組織化の上に「見えない解放区」が農民を主体として形成される。

の仕事を助けながら、農民の困難な課題や要求を見つけ、誰が敵であるかが味方を教え、貧農や農業労働者に対する教育活動を行う。このでの教育は、フィリピンの歴史やフィリピン社会の「三つの基本問題」とされる半封建制・帝国主義・官僚資本主義などについて農民たちに学習させることに重点がおかれる。これらの学習と並行して青年・女性・農民のグループが形成される。

ブルジョアジーであり、武装闘争をもつてこのフリーピン社会を変えること」、「労働者階級の同盟者として農民が立ち上がる」と呼びかけるのである。

木地帯に住み、その中で貧農によく農業労働者の占める比率は約七五% 中農は約一五%、富農は約五%であり、地主は約一・二%にすぎない。ほんの一握りの地主に支配された圧倒的多数の農民の極めて困難な状

おける革命的大衆運動の組織化を再建当初より意識的に開始した。

（C.F.P.は資農と農業労働者を第一活動者階級の同盟者として位置づけ、農民に対するプロレタリア階級の革命的指導性と、武装闘争・土地革命・農村根拠地建設を農村における人民戦争の遂行のための不可欠な要素として農民の組織化を開始したのである。）

この農村・山岳地帯におけるN.P.A.のたたかいは、フィリピン革命におけるN.P.A.のきわめて重要な位置を示している。N.P.A.は、決して單なる戦闘組織ではない。N.P.A.は、第一に、最も英雄的な革命の正規軍であり、第二に、最も献身的な農村の工作者・組織者であり、最後に、被抑圧大衆、労働者農民大衆の最高の團結組織である。

## ●NPAの建設と拡大

一九六九年三月二九日、約五〇人の戦士によって中部ルソンのタルラ



Manggagawa ng buong daigdigan mag kaisa! Pang-daigdigong pag-kakaisa ng manggagawa Pilipino at Rapon!

一九六九年三月二九日、約五〇人の戦士によって中部ルソンのタルラ

三里塚一期工事強行の攻撃は、日帝の侵略反革命戦争準備の重要な一環としての軍事空港建設の攻撃である。

日帝—ブルジョアジーにとって、日米安保体制のもとで、いつでも軍事空港に転用しうる巨大空港の建設は、決定的に重要な位置を持つてゐる。それは、大規模な軍用機の発着に必要であるとともに、巨大空港建設とともに航空管制や情報集中のシステムが戦時において重要な役割をはたすからである。

日帝にとって、これらの航空管制技術は、原発・電子・通信・宇宙開発などと共に、重要な軍事技術の位置を持っている。近代戦を遂行するうえで不可欠なこれらの技術をめぐって、帝國主義諸国は激しい開発競争を行つてゐる。

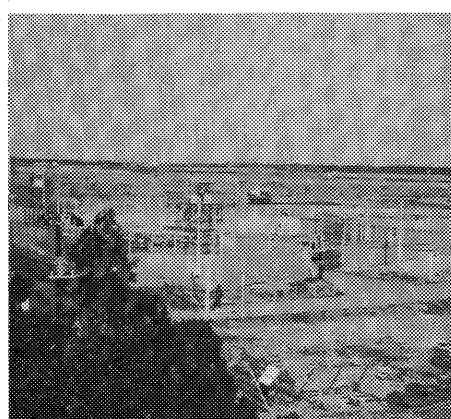
日帝は表面上、これららの技術を極力経済的側面に振り向けて世論の批判を避けつつ、一挙に軍事転用する機会をうかがつてゐるのだ。

すでに自衛隊が、潜在的には世界最大級の軍隊になつてゐることは各方面から指摘されている。航空技術の分野においても、いつでも使える滑走路と共に、航空管制の集中、通信技術などが軍事上不可欠なものとして扱われている。

しかし、三里塚空港は現在、表面的には軍事空港として使われてゐるわけではない。日帝は今、軍事利用することによって、ふたたび三里塚闘争が日帝の立脚基盤をゆるがす闘争に発展することを何よりも恐れているからである。

日帝は、現在、侵略反革命戦争に乗り出すために、思想的・制度的な拡張一致体制を作りをねらつてゐる。「連合」結成を通じた労働運動の産業報国会化がその基盤をなすものである。そして拡張一致体制作りの政治的・思想的統合環として、天皇制攻撃がおし進められている。

この下で、三里塚空港の軍事使用のための策動が着々と進んでゐる。この間の天皇Xデー攻撃下で、「大喪」のための「国賓の輸送」と称して自衛隊機が成田と羽田の間を飛んだ。まさしく、天皇の名のもとに空港の軍事利用の道が開かれたと言える。この事實を見ても、日帝の野望は明らかである。



16mの横堀のヤグラ。右は機動隊駐車場

三里塚一期工事強行の攻撃は、日帝の侵略反革命戦争準備の重要な一環としての軍事空港建設の攻撃である。

日帝—ブルジョアジーにとって、日米安保体制のもとで、いつでも軍事空港に転用しうる巨大空港の建設は、決定的に重要な位置を持つてゐる。それは、大規模な軍用機の発着に必要であるとともに、巨大空港建設とともに航空管制や情報集中のシステムが戦時において重要な役割をはたすからである。

日帝にとって、これらの航空管制技術は、原発・電子・通信・宇宙開発などと共に、重要な軍事技術の位置を持っている。近代戦を遂行するうえで不可欠なこれらの技術をめぐって、帝國主義諸国は激しい開発競争を行つてゐる。

日帝は表面上、これららの技術を極力経済的側面に振り向けて世論の批判を避けつつ、一挙に軍事転用する機会をうかがつてゐるのだ。

すでに自衛隊が、潜在的には世界最大級の軍隊になつてゐることは各方面から指摘されている。航空技術の分野においても、いつでも使える滑走路と共に、航空管制の集中、通信技術などが軍事上不可欠なものとして扱われている。

しかし、三里塚空港は現在、表面的には軍事空港として使われてゐるわけではない。日帝は

今、軍事利用することによって、ふたたび三里塚闘争が日帝の立脚基盤をゆるがす闘争に発展することを何よりも恐れているからである。

日帝は、現在、侵略反革命戦争に乗り出すために、思想的・制度的な拡張一致体制を作りをねらつてゐる。「連合」結成を通じた労働運動の産業報国会化がその基盤をなすものである。そして拡張一致体制作りの政治的・思想的統合環として、天皇制攻撃がおし進められている。

三里塚一期工事強行の攻撃は、日帝の侵略反革命戦争準備の重要な一環としての軍事空港建設の攻撃である。

日帝—ブルジョアジーにとって、日米安保体制のもとで、いつでも軍事空港に転用しうる巨大空港の建設は、決定的に重要な位置を持つてゐる。それは、大規模な軍用機の発着に必要であるとともに、巨大空港建設とともに航空管制や情報集中のシステムが戦時において重要な役割をはたすからである。

日帝にとって、これらの航空管制技術は、原発・電子・通信・宇宙開発などと共に、重要な軍事技術の位置を持っている。近代戦を遂行するうえで不可欠なこれらの技術をめぐって、帝國主義諸国は激しい開発競争を行つてゐる。

日帝は表面上、これららの技術を極力経済的側面に振り向けて世論の批判を避けつつ、一挙に軍事転用する機会をうかがつてゐるのだ。

すでに自衛隊が、潜在的には世界最大級の軍隊になつてゐることは各方面から指摘されている。航空技術の分野においても、いつでも使える滑走路と共に、航空管制の集中、通信技術などが軍事上不可欠なものとして扱われている。

しかし、三里塚空港は現在、表面的には軍事空港として使われてゐるわけではない。日帝は

今、軍事利用することによって、ふたたび三里塚闘争が日帝の立脚基盤をゆるがす闘争に発展することを何よりも恐れているからである。

日帝は、現在、侵略反革命戦争に乗り出すために、思想的・制度的な拡張一致体制を作りをねらつてゐる。「連合」結成を通じた労働運動の産業報国会化がその基盤をなすものである。そして拡張一致体制作りの政治的・思想的統合環として、天皇制攻撃がおし進められている。

## 革命的労農共闘を建設し、三・26=三里塚現地へ！

「九〇年空港完成」プランが破産し、今年一二月の事業認定二〇年の期限切れが目前に迫るなかで、焦りの色を濃くする日帝—空港公団は、反対同盟切り崩し攻撃をますます激化させ、同時に特別立法などの強権発動をも準備して、なりふりかまわざ空港建設を強行せんとしている。

八九年は正念場中の正念場である。今春三・二六現地闘争に決起し、軍事空港粉碎、二期決戦勝利の道を切り開こう。

八九年は正念場中の正念場である。今春三・二六現地闘争に決起し、軍事空港粉碎、二期決戦勝利の道を切り開こう。

われわれはこの日帝—公団の攻撃にたいし、真向からの反撃を組織せねばならない。

具体的には、用地内反対同盟に対する切り崩し攻撃を許さず、B・C滑走路建設を阻止することである。

日帝は、強制収用の道を開こうとしている。

一期用地内の團結小屋・一坪共有地をまず対象にして支援と反対同盟の分断をはかり、次いで用地外農家の用地内農地、そして用地内農家の家屋と農地への強制収用を狙つてゐる。

このような攻撃に対し、二期用地内、木の根の小川源氏は「ブルジョアの金もうけに協力するわけにはいかない。一坪も渡さない」と固い決意を述べている。また反対同盟代表の熱田一氏は「私の土地は私の土地であると同時に、全国のたたかう人々の土地もある。戦争のための空港建設を許さず、農地を守り抜く」と宣言している。

一二年間の歴史の上に反対同盟農民の決意はますます強く、三里塚闘争は不屈にたたかい続けれられている。

また、現地反対同盟農民の激しい反対闘争に加えて、世論調査においても強制収用反対の意見が賛成を上回るという事態の中での千葉県収用委員の全員辞任や、事業認定二〇年の期限切れが目前に迫るという状況の中で、日帝—空港公団は、暴力的攻撃をおこなつてきている。

特に、木の根・東峰・横堀においては、すべての生活道路両側に有刺鉄線が張りめぐらされ、部落の出入り口における機動隊の検問が常態化している。そして、二月二十四日の「大喪」に際しては、一ヶ月前から他府県の機動隊を動員しての警備体制の強化、二〇日から二六日までの一週間にわたる空港の入場制限、さらに空からはヘリコプターが監視するという戒厳体制がされた。まさに反革命治安部隊として、機動隊が空港を日常的に警備しているのである。

かかる暴力的な手段と、既成事実の重圧による切り崩し攻撃を絶対に許すことはできない。

同時に、農業基盤の破壊をも含む、反対同盟組織破壊攻撃に対する反撃を組織しなければならない。

日帝—空港公団は、二期推進の世論形成と反

対同盟の孤立化を狙って、成田用水改築をはじめ関連事業を進めてきた。現在、農産物輸入自由化や減反政策など、農業破壊攻撃が激化する中で、反対同盟農民の中からも農業改良を掲げた空港関連事業に屈伏する部分が生み出されている。

また、騒特法適用による周辺住民追い出し攻撃と一体のものとして、土地利用計画の具体化が進められ、公害企業や産業廃棄物処理場建設が押し寄せ、工業団地が次々と建設されている。その多くはいわゆるハイテク産業であり、「公害を出さないきれいな産業」と宣伝されている。しかし実際には、トリクロロエチレンやフロンガスなどのきわめて有害な廃棄物を生み出している。そればかりではない。これらハイテク産業が、空港の軍事転用と同時に、有能な軍事技術として転用されるることは疑いない。

また、空港関連事業の推進と共に、権力の日常的な徘徊、暴力支配が強められている。

対同盟の孤立化を狙って、成田用水改築をはじめ関連事業を進めてきた。現在、農産物輸入自由化や減反政策など、農業破壊攻撃が激化する中で、反対同盟農民の中からも農業改良を掲げた空港関連事業に屈伏する部分が生み出されている。

また、騒特法適用による周辺住民追い出し攻撃と一体のものとして、土地利用計画の具体化が進められ、公害企業や産業廃棄物処理場建設が押し寄せ、工業団地が次々と建設されている。その多くはいわゆるハイテク産業であり、「公害を出さないきれいな産業」と宣伝されている。しかし実際には、トリクロロエチレンやフロンガスなどのきわめて有害な廃棄物を生み出している。そればかりではない。これらハイテク産業が、空港の軍事転用と同時に、有能な軍事技術として転用されるることは疑いない。

また、空港関連事業の推進と共に、権力の日常的な徘徊、暴力支配が強められている。

## 社会主義革命の一翼へ

三里塚闘争は二三年にもおよぶたたかいのな

かで決定的な局面を迎えている。反対同盟の団結を固め、全国労働者人民の総決起で三里塚闘争の勝利を実現しなければならない。

われわれはそのため以下の三つのたたかいを強化する決意である。

その第一のたたかいは、三里塚闘争を日本帝

国主義と正面対決するプロレタリア政治闘争として前進させることである。

三里塚闘争は、農民の「土地を守れ」というたたかいから出発した。だが二〇年にもわたり労働者人民の一大闘争拠点として三里塚闘争が存在し続けたのは、反対同盟農民の「農地死守・実力闘争」という戦闘性にのみ根拠があるのではない。

三里塚闘争は革命的左翼との結合を通して、六〇年代後半の「ベトナムに飛行機を飛ばすな」というスローガンに示される、「反戦反核の誓」「政府打倒の実力闘争」というたたかいの質を獲得してきた。このように、日帝と正面対決する政治闘争としての性格を保持し続けてきたことが、労働者人民の結束を可能にしてきた主要な根拠であった。

しかし八三年三・八分裂の困難な局面は、この政治闘争としての三里塚闘争の性格をあいまいにし、反対同盟のたたかいを地域的な農民運動へと固定化することによっては決して実現されない。

なぜなら農民の「土地を守れ」という闘争は、くら戦闘的であっても、それ自体は農民階級の小生産手段防衛の経済闘争にすぎないからである。このような狭い経済要求に対しても、日帝ブルジョアジーは、労働者階級と対立・反目させ、相互不信をあおりたてようとする。あるい



二期用地の真中に位置する現闘本部と高さ

ない状況がつくりだされようとしている。  
わが反対同盟もまた全面的にこの攻撃にさらされている。

反対同盟の團結を、「小生産手段の戦闘的防衛」の枠組みにとどめることなく、反対同盟内部に社会主義革命をめざすプロレタリア的指導部を建設し、反対同盟の階級的團結を強化しよう。

第三には、右翼日和見主義者、急進民主主義者との原則的党派闘争を通して、三里塚闘争を社会主義革命の一翼へと組織しうることである。

右翼日和見主義者や市民主義者のごとく、三里塚闘争を土地強奪に対する農民の反対運動、あるいは軍事空港建設に対する政策変更要求運動へと歪曲しようとする部分は日帝との正面対決をあいまいにするものであり、われわれは彼らを断固として批判しぬかなければならない。

あるいは、農作業の共同化や農産物販売の共同化の延長上に社会主義の團結が生まれるとする傾向も、プロレタリア階級闘争との結合をあまりにする限り無力である。

他方、急進民主主義者は、右翼日和見主義者や市民主義者とは異なって、三里塚闘争の日帝打倒闘争との結合とその不可分離性を主張している。だが彼らの日帝打倒闘争は、プロレタリア独裁の樹立というプロレタリアートの階級的目的と切離されたものでしかない。彼らは三里塚闘争を戦闘的農民運動の枠にしばりつけ、三里塚闘争に結集する先進的労働者人民を社会主義革命に向けて組織するという任務を放棄しているのである。

右翼日和見主義・急進民主主義諸党派の路線的誤りは、プロレタリア階級闘争の陣型を作り出すことができず、三里塚闘争をプロレタリア階級闘争から切離された孤立した農民運動へと促進したことにある。彼らの路線は、プロレタリアートの大衆的組織化を社共にゆだねたままで、市民運動に依拠して改良の幻想をふりまき、あるいは、学生運動に依拠して日帝に対する戦闘的急進化を追求するものであった。

しかし、社会排外主義に純化している社共にいささかも労働者階級の運命を委ねることはできない。実際に、総評は破産をとげ、「連合」に合流せんとしている。社共の労働運動指導は、日帝の新植民地主義支配の利潤の分け前の拡大要求であり、労働者人民の決起をブルジョアジー主主義の枠内での改良要求に封殺し、これを越えてつき進む労働者人民のたたかいをブルジョア国家権力と共に封殺するものである。

われわれは三里塚闘争の歴史的勝利をかけて、プロレタリア社会主義革命に向けた労働者・農民の革命的共闘をつくりだす決意である。そしてこのたたかいを基礎に、プロレタリア革命に向けた階級闘争に、わが国の農民階級を結集させていく道を切り開く決意である。三・二六闘争に総決起し、二期決戦に勝利せよ。

資本主義は、生産手段を所有する階級が、無產階級（プロレタリアート）を賃金奴隸として支配する社会体制に他ならない。この社会体制の中では、農民階級は、ブルジョアジーが強権的に農地を奪おうとした時には、激しくこれに抵抗するが、ブルジョアジーが農民の小生産手段ゆえに、資本主義のもとでは不斷に動搖せざることである。

反対同盟の團結は「農地死守・実力闘争」という戦闘的農民運動のそれである。そして「戦後民主主義」の防衛、「反戦平和」の意識も強固に存在している。しかしそれはいくら戦闘的にはあっても「小生産手段の防衛」という立場導部を建設し、反対同盟の階級的團結を強化することである。

第二には、反対同盟内部にプロレタリア的指導部を建設し、反対同盟の階級的團結を強化することである。

反対同盟の團結は「農地死守・実力闘争」という戦闘的農民運動のそれである。そして「戦後民主主義」の防衛、「反戦平和」の意識も強固に存在している。しかしそれはいくら戦闘的にはあっても「小生産手段の防衛」という立場導部を建設し、反対同盟の階級的團結を強化することである。

第三には、右翼日和見主義者、急進民主主義者との原則的党派闘争を通して、三里塚闘争を社会主義革命の一翼へと組織しうることである。

右翼日和見主義者や市民主義者のごとく、三里塚闘争を土地強奪に対する農民の反対運動、あるいは軍事空港建設に対する政策変更要求運動へと歪曲しようとする部分は日帝との正面対決をあいまいにするものであり、われわれは彼らを断固として批判しぬかなければならない。

あるいは、農作業の共同化や農産物販売の共同化の延長上に社会主義の團結が生まれるとする傾向も、プロレタリア階級闘争との結合をあまりにする限り無力である。

他方、急進民主主義者は、右翼日和見主義者や市民主義者とは異なって、三里塚闘争の日帝打倒闘争との結合とその不可分離性を主張している。だが彼らの日帝打倒闘争は、プロレタリア独裁の樹立というプロレタリアートの階級的目的と切離されたものでしかない。彼らは三里塚闘争を戦闘的農民運動の枠にしばりつけ、三里塚闘争に結集する先進的労働者人民を社会主義革命に向けて組織するという任務を放棄しているのである。

右翼日和見主義・急進民主主義諸党派の路線的誤りは、プロレタリア階級闘争の陣型を作り出すことができず、三里塚闘争をプロレタリア階級闘争から切離された孤立した農民運動へと促進したことにある。彼らの路線は、プロレタリアートの大衆的組織化を社共にゆだねたままで、市民運動に依拠して改良の幻想をふりまき、あるいは、学生運動に依拠して日帝に対する戦闘的急進化を追求するものであった。

しかし、社会排外主義に純化している社共にいささかも労働者階級の運命を委ねることはできない。実際に、総評は破産をとげ、「連合」に合流せんとしている。社共の労働運動指導は、日帝の新植民地主義支配の利潤の分け前の拡大要求であり、労働者人民の決起をブルジョアジー主主義の枠内での改良要求に封殺し、これを越えてつき進む労働者人民のたたかいをブルジョア国家権力と共に封殺するものである。

われわれは三里塚闘争の歴史的勝利をかけて、プロレタリア社会主義革命に向けた労働者・農民の革命的共闘をつくりだす決意である。そしてこのたたかいを基礎に、プロレタリア革命に向けた階級闘争に、わが国の農民階級を結集させていく道を切り開く決意である。三・二六闘争に総決起し、二期決戦に勝利せよ。



### ロンドンにあるマルクスの墓

# 賃上げ有害論に科学的批判

## 第1インター内の論争に決着つける

クーニン主義、政治闘争を過少評価して労働組合を日常の小改良闘争だけにかぎらうとする労働組合主義、普通選挙権と國家の補助を受けた生産協同組合の創立のみが社会主義への道だとするラサール主義。マルクスはこれらとたたかい、正しい理論を基礎とするインターを建設していくた。

協同組合の組織によって、ブルジョア社会をそっくり社会主义社会に変えることができるとするオーエン主義、労働者の貧困は自然の法則であるとするマルサス主義、ブルードーンの流れをくんで平等と無政府主義を一揆によつて獲得しようとするバ

マルクス的な社会主義（マッツィー、二、ブルードン、バクーニン、イギリスの自由主義的組合主義、ドイツのラサール派の右翼的偏向など）の共同行動の軌道に向かわせるようにつとめ、これらすべての宗派や小学校の理論とたたかいながら、さまざまなかつては、その他の多くの國の労働者階級のプロレタリア派の理論とたたかいながら、さまざまなかつては、その他の多くの國の労働者階級のプロレタリア

起草者であった。マルクスは、さまざまな国の労働運動を統合し、さまざまな形態の非プロレタリア的、前

ルが創立されたとき、マルクスは宣言と規約を作成し、それを運動の指針として提示した。レーニンは「カール・マルクス」のなかで、当時の様子を次のように描いている。「一八六四年（九月二八日）には、有名な第一インター・ナショナル、すなわち『国際労働者協会』が、ロンドンで創立された。マルクスはこの協会の魂であり、その最初の『創立宣言』や数多くの決議や声明や宣言の

卷之三

この書は、マルクスが一八六五年六月一〇日と二七日に、第一インターナショナル中央評議会でおこなつた講演をおさめたものである。そして、マルクス主義経済学のもつとも重要な著作である。

古典  
習學

⑦ 貸金・価格・利潤

第一インターのなかで委員会は、トンは、資本主義内での労働者の地位改善闘争は有害だと唱えた。

ノルハニの小説

は次のように問題を提案した。「第一、労働者階級の社会的物質的福利は、一般に賃上げによつて向上させられるか。第二、賃上げを確保しようととする労働者団体の努力は、他の産業部門に有害な作用をしないか。提案者は、第一の命題には、改善できない、第一の命題には、有害だといふ立場をとると明言した」（『僕金・価格・利潤』国民文庫版・解題参考）。

## ●賃金奴隸制度の廢止

マルクスは六から積極的に主張を展開していく。労働者はその労働ではなく労働力を売っているのであり、剩余価値は労働者の剩余労働にばかりならず、剩余労働は資本家のための不払労働である。さらに「剩余価値、つまり商品の総価値のうち労働者の剩余労働、つまり不払労働が体現されている部分を、私は利潤と名づける」（六三頁）。「資本家と労働者は、この限られた価値、すなわち労働者の総労働ではかった価値を分けるよりほかないのである。…賃金が上がれば利潤は下がることになる。…賃金の全般的上昇は、一般利潤率の低下をもたらしはするが、価値に影響を及ぼしはしないだらう」（六八頁）。

最後に、マルクスは労働者の日常闘争と経済的解放の関係について語っている。講演がなされてから百年以上へた今日、なおそれは有効であり実践的である。

商品の価値を決定するという主張から、われわれは、労働の価値が諸費やされる諸商品の価格によっては、そのときにはもう諸商品の価格は上がつてしまつてゐるからである、と。こうしてわれわれは、労働の価値が諸商品の価値が上がれば価格も上がるざるをえない、と。つきに彼は一転してわれわれにこう説明した。賃上げをしてもらひだらう。

うていできなくなる」とはまちがい  
ない。それと同時に、かつまた賃金  
制度にともなつてゐる一般的奴隸状  
態のことは全然べつとして、労働者  
階級はこれらの日常鬭争の究極の効  
果を過大視してはならない。…「公  
正な一日の労働にたいして公正な一  
日の賃金を!」といふ保守的なモッ  
ターのかわりに、彼らはその旗に  
革命的な台言葉を書きしるすべきで  
ある。」